

「河崎ショック！」余聞



2019/5/19 25周年記念行事



2019/7/6 イタリアン料理講座

注：文中では文章のつながりなどで一部敬称略ですのでご承知ください。

「楽しみは後にとって置く」なんて、悠長な気分になれない、齢80歳になりました。

「コロナウイルス」と共生する生活なんて、自分にとっては、「ご免こうむりたいところ」で、どっこい受け入れ難い大きな試練ですと言いながらも???

さてさて、掲げた「表題」が、「今を時めく河崎啓一さん」で、何事かと驚かれる方が殆どと思われますが、我が身にとっては一大事です。

皆さんにその一端だけでもご披露してみたい気持ちに駆られて筆をとりました。

ご存じのように、昨年5月19日、「湘現会の25周年行事」が、「鎌倉芸術館」で開催され、盟友3人での会食も弾み、「弁当美味しかったよ!」とお褒めの言葉で、幹事役もホッコリすると同時に、ご本人からはお聞きしていませんでしたが、同じ日付で、朝日新聞の「男のひといき欄」に、奥さんとの「63年間の思い出」を書き綴った「投稿文」が掲載されているとのことでした。

翌朝、早々と郵便受けから、待っていましたと、新聞を広げ、限られた字数で、見事なまでの文体で、さすがに「木村治美先生」のエッセイ教室の「門下生」だけあって、「読む人の心まで瞬く間に奪う」のではないかと錯覚すら覚えてきました。

更には、引き続き、今年の3月にお書きになった「感謝離・ずっと一緒」を贈っていただき、拝見するに、出会いから、お別れまで、「和子好き!」「パパ好き!」で、「天国でもずっと夫婦」と、ページはじめから、ページ終わりまで「夫婦愛の交流」が、これでもか、これでもかと、紙面狭しで、私には考えが及ばないような光景が、怒涛のようにいっぺんに押し寄せ、家内も読後には、世にも素晴らしい「夫婦像の鏡」と絶賛する有様です。

定年後、老人夫婦の共存共生は、趣味などは別々に、お互いに干渉しあわず、「つかず、離れずの関係」がベストと嘯き、何かがあっても適当に煙に巻いていたのが、思わぬ「コロナショック」で、時間を持て余し、会話が弾むどころか、この本で背中を押されるが如く、「あんなことあったね、こんなことあったね」と、つぶやき気味に、耳の痛い話題が多くなり、頷くどころか、「河崎ショック」で、枕を抱え込み、今にも寝込みそうです。

どなたか、いい知恵を授けて頂けませんか。